

歴史に名を残した一流 水泳の聖地 浜松・浜名湖の英雄

世界記録を33回更新
敗戦国に勇気を与えた
伝説のスイマー



Furuhashi Hironoshin
古橋廣之進
(1928~2009)

浜松二中(現・浜松西高)→日本大学→
日本水泳連盟第7代会長→
日本オリンピック委員会第13代会長

古橋廣之進は昭和3年、雄踏町(浜松市西区)で誕生した。当時の浜名湖では、伝統的に遠泳が行われ、小学生は遠泳をするのが当たり前だった。そんな中でも古橋は将来を期待されるスイマーだったが、戦争の激化と事故による左手中指切断という悲運に見舞われ、一時水泳を諦める。しかし、終戦を迎え「ハンデは工夫で克服し、魚になるまで泳ぐ」と再び水泳に打ち込み、大学対抗水泳大会や国民体育大会、学生選手権で優勝。そして敗戦国として参加が認められなかったロンドンオリンピックに代わり開催された、日本水泳連盟主催の日本選手権大会に出場。1500m自由形で世界新記録を樹立した。これはロンドンオリンピックの金メダリストを40秒以上も上回る記録であった。その後も、数々の大会で世界新記録を更新し続け、敗戦国日本の威信を高め、国民に勇気を与えた。引退後も、日本水泳連盟の会長、日本オリンピック委員会会長、アジア水泳連盟会長などを歴任し水泳界を支えた。

CHECK

古橋廣之進記念
浜松市総合水泳場ToBiO



競泳国際大会代表選考会やシンクロナイズドスイミングJAPAN OPENなども開催された。国際規格の50mプールや飛込プールがありながら、市民の健康増進のためのフィットネス・レジャー・リラクゼーションスポットとしての各種施設も併せ持ち、多彩なスクールも実施している。ここで毎年夏に行われる、古橋廣之進の名を冠した小学生の全国大会「とびうお杯全国少年少女水泳競技大会」や、浜松市内すべての小学校が必修とする「30分間回泳」は、水泳の聖地の伝統行事である。

問/古橋廣之進記念
浜松市総合水泳場 ToBiO
☎053-489-5463



TOPICS 受け継がれるレガシー②

田畑政治や古橋廣之進の想いを未来へ繋ぐ
今もなお「浜名湖遠泳」を続ける伊目小学校

浜名湖畔に位置する細江町気賀の「伊目小学校」では、浜名湖での遠泳大会が伝統行事となっている。1kmと500mのコースがあり、5回にわたる遠泳検定に合格した4年生以上の児童が参加する。そして先生や親のみならず地域の人たちが、安全に遠泳ができるように入念に浜名湖の水質検査や清掃活動を行い、当日は船も出す。「子どもたちに心身ともに強くなってほしい、自然の素晴らしさと達成感を肌で感じて、自信をつけてほしい」との願いから、今も毎年夏に実施されている。 問/伊目小学校 ☎053-523-0253



Swimming

日本水泳界に革新をもたらした浜松出身の英雄。それは東京オリンピック開催のキーマンだった「田畑政治」と「フジヤマのトビウオ」と称賛された世界的スイマー「古橋廣之進」だ。2019年の大河ドラマ「いだてん」は、1912年の日本のオリンピック初参加から1964年の東京オリンピックが開催されるまでを描いたもので、主人公の1人として田畑政治が取り上げられる。彼を師として仰ぎ、大活躍したのが古橋だ。2020年の東京オリンピックを控えた今、大注目の2人である。



Tabata Masaji
田畑政治
(1898~1984)

浜松一中(現・浜松北高)→
東京帝大(現・東京大学)→
日本水泳連盟第2代会長→
日本オリンピック委員会第10代会長

1964年日本初の
東京オリンピックを
招致した男

TOPICS 受け継がれるレガシー①

歴史ある水泳文化を後に継ぐため
トライアスロンスクールを開校

足田浩気さんは競泳選手として、第1回東アジア大会で銀メダル、世界水泳福岡大会25kmでアジア人1位を獲得するなど活躍した。その後、トライアスロンに転向し、ワールドカップ日本代表に選ばれ、数々の大会で優勝の実績を持つ。歴史ある浜松の水泳文化と、活動が盛んな陸上競技と自転車を組み合わせたトライアスロンは、まさにこの地で次世代に繋げていくべきスポーツ。そのためには本気で取り組むスクールが必要だと、自らハイドロパワートライアスロンスクールを設立。最初はわずか数名だったが、12年経った今、約60名の選手が所属している。浜松の地でトライアスロンをもっとメジャーにするために、自らも45~49歳のエイジカテゴリーでのトライアスロン世界チャンピオンを目指している。

一流トライアスリート 足田さん



田畑政治は明治31年、成子町(浜松市中区)で誕生した。体があまり丈夫でなかったため、幼少期から浜名湖で泳ぎ鍛えていたという。地元中学の卒業生により創立された「遠州学友会水泳部」に入会し、リーダーシップを発揮。選手としても活躍できるようにまでなったものの、悲運にも大病を患い、断腸の思いで選手を引退し、指導者に転身する。そして、地元小さな水泳部の運営から全国大会の開催、ついにはオリンピックへと世界に活躍の場を広げていく。だが、戦時中、軍部の統制下にあった日本はスポーツ自体が禁止された。戦後、オリンピック組織委員会を発足したのにも関わらず、国際社会から日本の出場を拒否されるなど、散々たる状況に。そんな苦難を乗り越え、1948年日本水泳連盟の会長に就任する。翌年、国際水泳連盟への復帰を果たし、全米水泳選手権に古橋廣之進をはじめとする日本人選手の出場を実現。古橋は驚異的な世界新記録で優勝し、日本人の地位向上に貢献する。1958年以降、田畑は東京オリンピック招致に向けた準備委員会を牽引し、組織委員会事務総長として、悲願の招致に成功した。